

農作物生育・技術情報10号

日高農業改良普及センター日高西部支所
JAびらとり JA門別町

1 水 稲

○収穫後のほ場管理

(1) 稲わらの処理

稲わらは、ほ場に放置せず速やかに搬出しましょう。

(2) 透排水性の改善

溝掘りで表面排水を促しましょう。必要に応じ、心土破碎を実施しましょう。

秋起こしを行う場合は、水田の乾燥状態を確認し、早め（地温があるうちに）に行いましょう。

(3) 畦などの確認

畦の補修や排水溝の掃除を行い、水田の機能を回復させましょう。

(4) 土壌診断の実施

3年に1度は水田の土壌診断を行い、収量や地力に合わせた肥料の見直しを行いましょう。また、必要に応じて苗床のpH確認も実施しましょう。

2 主要野菜

作物名	生育状況	技術対策
トマト	・ 灰色かび病（ゴーストスポット）、すすかび病、うどんこ病、裂果が見られる	・ ハウスの閉めきりは避ける ・ 老化葉は摘葉し、通気性をよくする ・ 果実の結露を避けるため暖房機を使用し、早朝の側窓開放は徐々に行う
ハウス軟白ねぎ	・ 5～6月定植収穫中 ・ アザミウマ類、ハモグリバエ類が見られる	・ 収穫終了後はもみ殻を搬出する ・ 土壌病害虫が発生したほ場は計画的に土壌消毒を行う
アスパラガス （ハウス立茎）	・ 9月中旬に収穫終了した ・ 茎葉の黄化が始まっている ・ 灰色かび病、斑点病が見られる	・ ハウスを開放し、茎葉の黄化を促す ・ 茎葉が80%以上黄化し、地際部の茎の中がストロー状になったのを確認してから刈り取る
きゅうり	・ 中～上段位の孫づるの収穫が進んでいる ・ うどんこ病、べと病、アブラムシ類の発生が一部で見られる	・ 病害虫防除を行い、うどんこ病やべと病には予防・治療効果のある薬剤を使い分け防除効果を高める ・ 気温の低下が予想される場合は、夜温13℃を目安に内張りカーテン等で保温する
いちご	・ 一季成り性品種：株養成 ・ 四季成り性品種：収穫	・ 病害虫防除を行い、ランナーや枯葉は適宜除去する

3 畑 作

(1) 秋まき小麦のコムギなまぐさ黒穂病・雪腐病防除

発生が懸念されるほ場では根雪前（10月下旬～11月中旬）に薬剤を散布しましょう。

秋が深まるとほ場が乾きづらくなるため、ほ場状態にも注意し防除をしましょう【薬剤例：フロンサイド SC 1,000倍】

表1 雪腐病に対し薬剤の効果が持続する散布後から根雪までの降水量

薬剤名	黒色小粒菌核病	褐色小粒菌核病
フロンサイドSC	積算降水量120mm または日最大降水量65mm	積算降水量150mm

※散布後、積算降水量に達した場合は再散布を検討

(2) 翌年の作付けに向けたほ場準備

- ・特に転換畑や排水不良地では、額縁明きよの施工や畦畔切断による排水路への接続、サブソイラの施工など排水対策を実施しましょう。
- ・土壌診断結果に基づく石灰質資材の投入、堆肥施用による土づくりに努めましょう。

4 畜 産

○牧草

(1) 牧草の最終刈り取り

越冬のため十分な再生と貯蔵養分の確保が必要です。

右表を参考に、「刈取り危険帯」の刈取りを避けましょう。

刈取り危険帯	
アルファルファ	9月下旬～10月中旬
オーチャードグラス	10月中旬～下旬
ペレニアルライグラス	10月中旬～下旬

(2) 雑草処理

採草地でのギシギシ類の秋処理による防除は最終採草後に行い、降霜前までに終わしましょう。ギシギシ類への除草剤散布時期は、葉が手のひら大になった時期が目安です。新播草地は、更新後のギシギシ類の発生状況を確認し、必要に応じて除草剤散布を行います。薬量が経年草地と異なるため以下の表を参考に適正散布を心がけましょう。

薬剤名	使用濃度・注意点 (水量100ℓ/10a)	
	新播草地	経年草地
アージラン液剤	10月上旬～中旬 薬量：200ml～300ml/10a ※春期には種した草地にのみ使用	10月上旬～中旬 薬量：300ml～400ml/10a
	薬量：0.5～1.0g/10a ※ギシギシの葉が展開し、ギシギシ草丈が20cm以下	薬量：3～5g/10a

○サイレージ用とうもろこし

収穫後の堆肥の施用上限はK₂Oで20kg/10a相当量以下とし、堆肥の分析値がない場合、施用上限量は5t/10aを目安として下さい。

堆肥の施用時期は、10月中旬以降、積雪、土壌凍結前までとし、散布後は土壌と混和します。

5 農作業安全対策 ～9月、10月は秋の農作業安全運動強調月間です～

○面倒でも機械はストップ

⇒機械から降りて作業するときは必ずエンジンを止める

○機械操作時は周囲を確認

⇒周りに人がいないか、周囲の安全を確認してから作業

○1日の作業予定を家族に連絡

⇒1人で作業する時は家族に場所や作業時間を伝える

